

聖書：マタイ 6：9b

説教題：御名が聖とされますように

日時：2018年7月8日（朝拝）

先週から主が教えてくださった「主の祈り」について見始めています。先週は最初の呼びかけの部分を見ました。何事においてもスタートが肝心と思います。祈りにおいてもいかに正しく神を仰いで祈り始めるかが、その後の部分に決定的な影響を与えます。私たちがしばしば陥りやすいのは神をほとんど見上げず、ただ自分の願いや思いをベラベラ述べてしまうことではないでしょうか。それでは独り言を言っているのと何ら変わらなくなってしまいます。大切なことは先週も見たように、急いで祈らないこと。自分の言いたいことを言う前に、まず私が祈る先の神はどんな方かを良く見上げる。その方はイエス様によれば「父」、また「私たちの父」、そして「天にいます父」です。これらの言葉に込められた意味を良く思い起こしながら祈る。そうするなら私たちの祈りはきっと大きく変わるようになるでしょう。そう祈り始めることができた時点で、私たちが持っていた悩みや問題や心配はある意味でずっと小さなもの、いやほとんど解決したような状態にさえなると思います。

さて今日はいよいよ祈りの中身へと入ります。先に正しく神に呼びかけたら、あとは自分に関する祈りを色々述べて良いのでしょうか。そうでないことがここに教えられています。この後6つの祈りが祈られますが、それを見て分かることは前半の3つは神の栄光に関する祈りで、後半の3つは私たちの必要に関する祈りになっていることです。ここに主の祈りの大切なメッセージが示されています。それは神の栄光に関する祈りが先に来るということです。祈りは神中心でなければならない。私たちの祈りを振り返ってどうでしょうか。神の名をお呼びした後、すぐ自分のことを祈っていないでしょうか。もしそうなら、私たちは主の祈りのモデルに沿った祈りをしていないことになります。そうではなく、まず先に神に関する祈りが来るべきである。これは単なる手続きや礼儀ではありません。もし素晴らしい神を見上げて正しく呼びかけたなら、まずこの祈りが先に来るのが自然な流れです。「天にいます私たちの父よ！」と正しく呼びかけたことが、この第一の祈りとなって現れて来なくてはなりません。反対から言えば、私たちがこのように神とその栄光に関する祈りを先に祈ったかどうかで、神を正しく見上げて呼びかけたかどうか分かるということにもなります。

その第一の祈りは「御名が聖なるものとされますように」というもの。私たちは毎週の礼拝で文語訳に従って、「願わくは御名をあがめさせたまえ」と祈っていますが、ちょっとニュアンスが違うと思う方もいらっしゃるかもしれません。「御名をあがめさせたまえ」という言葉を私たちはどういう意味で祈っているのでしょうか。私たちにあなたの名前をあがめさせてください。今、礼拝に来て御前に立つにふさわしくない者ですが、あなたに礼拝することを許してください。このように理解していると意味が違って来ます。ここは第3版では「御名があがめられますように」と訳され、新改訳2017では「御名が聖なるものとされますように」と訳されています。「御名」とは神のお名前のこと。「名は体を現わす」と言いますように、名はその人そのものを現わしますから、御名とは神ご自身のことです。神は様々な名を持ってご自身を啓示して来られましたが、それらの名で現わされている神が聖とされますように！ということです。そして「聖とする」という言葉の基本的意味は、「区別する」「聖別する」「取り分ける」というものです。ですから「御名が聖なるものとされますように」とは、「神が他のすべてから全く区別されるお方としてふさわしく認められますように」ということです。神が神として区別され、そういう方にふさわしく畏れ敬われますように。神にふさわしい賛美と栄光が帰され、礼拝されますように！ということです。

なぜ神がそのように他から区別されてあがめられるべきなのでしょう。その理由の一つは、この神のみが創造者であり、その他のものはすべて被造物だからです。また造っただけでなく、この世界を今日あるように支え、保っているのも神だからです。詩篇19篇1節：「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」 また詩篇8篇：「あなたの指のわざであるあなたの天、あなたが整えられた月や星を見るに、人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。・・・あなたの御手のわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。羊も牛もすべて、また野の獣も空の鳥、海の魚、海路を通うものも。主よ、私たちの主よ。あなたの御名は全地にわたりなんと力に満ちていることでしょう。」 私たちは美術館や博物館に行って偉大な芸術家や彫刻家の作品を見て、その素晴らしさに感嘆し、ため息を漏らし、畏敬の念を持ちます。しかし私たちは聖書によれば、神の作品が無数に展示されている展示館の中を毎日歩き、生活しているような者です。この世界が輝きを放ち、宇宙の天体が規則正しく運行し、生命が住むのに適した環境が見事に整えられているのは、ただただ神のみわざゆえです。そういう神の作品に囲まれ、数々の恩恵を受けて生かされている私たちであるなら、どうして

その方への賛美をまずささげずに生きて良いものでしょうか。毎日起きるたびに、この世界を見渡すたびに、神こそが他の一切から区別され、まず第一に礼拝されることを熱心に求めて当然のはずではないでしょうか。

そして私たちにはもう一つの理由もあります。それは贖いの御業のゆえにもということです。この世界は初め素晴らしく造られ、私たち人間も非常に良いものとして造られましたが、人間は自分勝手に高ぶり、神の愛を疑い、墮落しました。その結果、本来ならすぐに罰され、永遠の滅びに投げ込まれてもおかしくありませんでした。ところが神はご自身から出る一方的な愛によって、罪に落ちた私たちを救ってくださろうと、かけがえのない一人子キリストを十字架の死にまでも送られました。そしてその方の身代わりの犠牲と引き換えに、この方を信じる者たちを救う道を開いてくださった。そしてその者の罪を赦し、さらに義と認め、さらに神の子どもという身分を与えて日々育てくださっています。そしてその者たちの行く先には、神の恵みによって聖められ、最後には栄光の状態に達して天の御国に入る者としていただけるという約束が与えられています。神がこのように私たちを救う神、贖いの神であることを見上げるなら、この方の名がすべてにまさってたたえられ、栄光が帰される以外のことを私たちが考えることはできないはずです。

しかし現実の世界では、そのように神が神として区別され、ふさわしく礼拝され、賛美されてはいません。むしろ至る所でこの方が無視され、軽んじられ、また不敬度が満ちています。その有様を見て私たちは心を痛めて「御名が聖なるものとされますように」と祈るのです。詩篇 67 篇に「神よ。諸国の民があなたをほめたたえ、諸国の民がみなあなたをほめたたえますように」とあるように祈るのです。あるいは詩篇 86 篇にある「主よ、神々のうちであなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比べられるものはありません。主よ、あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て伏し拝み、あなたの御名をあがめます。」ということが現実になるように、特にこの日本という国においてこのことが見られるように！とのビジョンを抱いて私たちは祈るべきなのです。

しかしこの祈りを祈る際、私たちはもっと根本的な問題があることに気付かされます。それはそのように祈る私はどうなのかということです。私は神に帰すべきふさわしい賛美と栄光と神に帰し、神があがめられることを第一の願いとする生き方をしているのか。私もいつしか神でないものを神とし、そちらに第一の関心が奪われていることはないの

か。それはお金だったり、持ち物だったり、名声や社会的地位・評判、快樂、健康、美貌、人間関係など、・・・私たち自身も御名を聖とする生活を送ってはおらず、むしろその区別をあいまいにし、結果的に御名を汚している。そのことに思いを至らせられて私たちは悔い改めなければならないのではないのでしょうか。決してこの祈りは平然と他人事のようにして祈れるものではなく、自分の胸を打ち叩いて、私を赦してください、憐れんでください、そして御名を聖とする生活をさせてくださいと涙しながら祈るべき祈りなのではないのでしょうか。

どうしたら良いのでしょうか。なぜ私たちの心は、まず先に神の栄光を求める燃えるような祈りが出て来ないほどに冷え切っているのでしょうか。それは神をさらに知るといふ歩みにおいて前進することをやめてしまっているからではないのでしょうか。私たちはしばしば神を求め始めたばかりの人たちに接すると励まされます。その人が一生懸命に神を求め、新鮮な思いで聖書に聞き、喜んで礼拝や集会に出席し、新しい発見をして感動している姿を見ると励まされます。そして神を求め、神を新しく知るとは、そういうことなんだよな～と思います。しかしもしそのことが、長年信仰生活を送っている者たちの間に神への感動が失われているとか、新しい発見がないことを意味するとしたら、それはとても残念なことです。長らくクリスチャン生活をしている人の誘惑は、いつのまにか自分はもう神について知るべきことは大体知る者になったと思うことではないのでしょうか。そう思う時にクリスチャンとしての成長はストップし、それと連動して神への愛も冷えてしまう。これは人間関係や夫婦関係においてもそうだと思います。これから結婚しようとする二人、あるいは結婚したばかりの二人を見ると、そのカップルは互いにときめき合っています。お互いにお互いのことに熱心です。そういう二人に近づくとき、「熱い！熱い！」と言わなければなりません。なぜそうなのでしょう。それはある側面から言えば、お互いにお互いのことをまだ良く知らないからと言えます。相手はとても神秘的な存在。そういう相手の新しい面、優れた面を一つ一つ発見して行くことは、新鮮な驚きと非常な喜びをもたらします。しかし結婚して長年一緒に生活する内に、もうこの人のことは全部分かっていると思うようになる。すると愛の関係は冷めてくる。もはや神秘的な存在でも何でもありません。これ以上新しい発見がないと思うとそうです。しかししばしば色々な出来事を通して、特にともに困難な問題に協力して立ち向かったりすることなどを通して、今まで知らなかった伴侶の姿、あるいはよく認めて来なかったすぐれた性格、考え方、その表現の仕方などに触れる時があります。そうすると私たちは相手への新しい尊敬と愛が再び燃え立たせられ、二人の関係が祝されるという

ことがあるのです。ですから夫婦はそのように、もう私は相手のことを全部分かっていると考えない方が良い。私はまだまだ相手のことを十分知っていないと考える方が良いのではないのでしょうか。そして実際、自分とは違う様々な神から与えられている賜物、感受性、また信仰姿勢を発見し、知っていくところに、新しい喜びと力があるのではないのでしょうか。とするなら神についてはもっとそうです。ローマ書 11 章に「ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。」とあります。たとえどんなに長く信仰生活を送って来ても、神は決して窮め尽くすことのできないお方。その愛の大きさ、広さ、高さ、深さは無限です。ですからパウロはピリピ書でこう言いました。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。」「兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはいけません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」あの大使徒パウロでさえ、私はまだまだ知らない。私は神を知る素晴らしさを求めてひたすら前に向かって走っていると言っているのですから、私たちも自分はもう神について知るべきことは大体分かって来たなどと豪語することなく、むしろ新しい人に負けないくらいもっともっと神を求めて行くべきではないのでしょうか。御言葉を慕い求めて読み、そこに啓示されている神を、祈りを通してさらに十分に、豊かに知ることへと向かうべきではないでしょう。そうするところに、尽きることのない新しい喜びと、神の御名のための熱心とが私たちに絶えず与えられるのではないのでしょうか。

そこから神の栄光のための生き方へと導かれるべきです。日曜日に教会に来て神を礼拝するばかりでなく、私の全生活を通して神の御名があがめられ、聖とされる生活へと進む。ある人は、でもそのように神を第一に求めたら私の生活はどうなるのか。神は良くても、私の幸いはなくなるのでは？と恐れるかもしれません。しかしウェストミンスター小教理問答問 1 は「人間の生きる主な目的」として、「神の栄光を現わし、永遠に神を喜ぶこと」だと答えます。すなわち「神の栄光を現わすこと」と「私たちの幸い」は別々のことではなく、一つにつながっていることである。神の栄光に第一の関心を向けて歩む時、私たちは人間として最も大きな喜びと満足に生きることになる。後のマタイの福音書 6 章 33 節も「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」と語っています。私たちがまず自分のこと

を第一に求め、それが満たされたら、余った時間とエネルギーとで神のことを、と考えているからすべてがおかしなことになるのです。そうではなく、「御名が聖とされること」を第一に祈り、神の国とその義とをまず第一に求める歩みへ進んで行くところに私たちの真の祝福があるのです。

イエス様はこのようにまず「御名が聖なるものとされる」ことを第一の祈りとするようにと教えてくださいました。これは私たちが生まれながらに持っている思いと何と違うものでしょう。このように教えられなければ、どうして私たちはこのような祈りをしたのでしょうか。私たちはこの主の祈りを祈るたびに自分の信仰のあり方をチェックさせられたいと思います。自己中心ではなく、神中心の生き方こそ神が私たちに備えてくださった祝福の道です。この正しい道に常に立ち返って神の御名が聖とされること、神が神として正しくあがめられることを何よりも求め、まず自らがそのように生きる者へ、そして全世界がそのように神をたたえることを祈り求める生活とその祝福へ、この祈りを通して導かれて行きたいと思います。